



Title	Eanst Käsemann, Der Ruf der Freiheit
Author(s)	滝沢, 武人
Citation	基督教学, 6, 41-46
Issue Date	1971-07-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46269
Type	other
File Information	6_41-46.pdf



[Instructions for use](#)

Ernst Käsemann

Der Ruf der Freiheit

4. Aufl., 1968, 210 S., (J. C. B. Mohr, Tübingen)

著者ケーゼマンは、ブルトマン学派に属するすでに著名な新約学者であり、ブルトマン神学を批判的に継承し、独自の道を開拓しつつある。周知のように、ケーゼマンのその鋭敏な問題意識からは、これまでにも、「史的イエスの問題」「新約聖書と黙示文学との関連の問題」「神の義の問題」などという、新約聖書に関するいくつかの重要な問題提起がなされており、多くの論議を呼んでいる。そして、本書も又、ケーゼマン自身が語る如く、新約聖書と現代神学とに関する「論争書」(eine Streitschrift, S. 7)なのであり、出版後一年にして四版を重ねた。

本書を貫くケーゼマンの意図は明らかであり、「キリスト教的自由という事柄」(die Sache der christlicher

Freiheit) から新約聖書全体を理解しようとすることにある (S. 9)。本書は七章から構成されている。以下、ケーゼマンが「自由」という視点から、どのように新約諸文書を見ているかについて、各章をそれぞれ簡単に紹介しよう。

第一章「イエスは自由であったか?」は、一九五二年にアムステルダムで語られたものであり、やはり二〇年という時の隔たり、情況と所の相違、福音書研究の推移とを感ぜざるを得ない。そこで、ここでは、最後の結論部分のみを示しておきたい。ケーゼマンによると、イエスは、たぐいまれな程自由であった。イエスは「神の子の自由」に立って生き、そして死に、行為し、そして語った。イエス以来、かつイエスを通じて、この「神の子の自由」が福音の真の特徴となり、キリスト教的と呼ばれるすべてのことの決定的な標識となったのである (S. 53)。パウロ、ヨハネらは、このイエスの「自由」を、自分達の現実の中で見出し、それを「福音」として把握し語ったのである。

第二章の「自由の福音書」とは、マルコ福音書である。

ケーゼマンは、原始キリスト教内部の「熱狂」(Enthusiasmus)に極めて高い神学的価値と実践的意義を与え(S. 69)。キリスト教的自由は、「この「熱狂」なしには存しなかったと考える(S. 71)。マルコ福音書は、まさにこの原始キリスト教の「熱狂」から直接的に生じたものである(S. 72)。しかしながら、正統教会は、「この「熱狂」と「自由」とを常に蔽い隠してきたのであり、マルコ福音書も、最近まで、他の福音書の陰に置かれてきたのである(S. 72, 76)。マルコ福音書の中心テーマは、神の支配の地上への顕現であり、この神の支配とともに、地上の艱難とサタンの試みの中から「自由の王国」が現われ始めている(S. 75)。マルコは、「地上の非悪霊化」(die Entdämonisierung der Erde)について語っており(S. 76)。マルコにおいて、イエスは「悪霊の偉大なる征服者」である(S. 72)。マルコは、周閉世界全体に充ちていた「救済の叫び」(Erlösungsruuf)を取り上げたのであり、ほかならぬ「自由の福音書」(das Evangelium der Freiheit)を書いたのである(S. 76)。

第三章「復活神学の賛否論」では、パウロ神学が論じ

られている。ケーゼマンの立場は、極めて明瞭であり、一貫して「十字架のみ」(sola crux)を強調する。端的に言うると、「復活は十字架の使信の一側面であり、十字架が復活教義の書の単なる一章なのではない」(S. 90)のである。そして、この十字架の神学のみが、「盲目的な服従と熱狂的な専横との間」(zwischen blindem Gehorsam und enthusiastischer Willkür)の正しい場所を、神の子の自由に対して与え得る(S. 97)。十字架の下でのみ、人間は自由であり、「人間の人間化」(die Menschwerdung des Menschen)が生ずる(S. 101)。キリスト教的自由は、復活の結果ではなく、「待望された復活の先取り」(die Vorwegnahme erwarteter Auferweckung)である(S. 97)。「復活神学」は、「この自由を決して実現しえないのみならず、それを制限し歪めるのであり、「十字架神学とならない復活神学は、コリントの例が示す如く、不可避免的に狂信(Schwärmerei)におちいる」(S. 111)。

ケーゼマンによると、パウロは「自由の神学者」(der Theologe der Freiheit)であり(S. 97) 1. Kor. 3:22 f. の「すべてあなたがたのもの、しかし、あなたがたはキリ

ストのもの」という逆説的な言葉が、このキリスト教的自由を正しく示しているのである(S. 105)。熱狂主義者達(die Enthusiasten)は、「すべてあなたがたのもの」という自由を認めた点において全く正しく(S. 105)。しかし、彼らは、「あなたがたはキリストのもの」というキリスト教的自由の限界(die Grenze der christlichen Freiheit)を再三折り砕くのであり(S. 106)。パウロは、この点において彼らを批判したのである(S. 107)。

第四章「教会化された自由」では、ヘブル書を除き、パウロ以後の諸書簡が論じられる。それらは、ほとんど、原始キリスト教の熱狂主義との論争の中で成立したものであり、熱狂主義を排除するとともに、「自由」もその根源的生命を喪失するに至る。ケーゼマンの言葉によると、自由は、もはやキリスト者とその教会の全生命を支える力ある「奔流」(Strom)ではなく、他の諸要素と並んで、教会の指導によって配される「水路」(Rinnsal)となっている(S. 115)。そこでは、美しい形式が、根源的に力に充ちた思考の代用をしており(S. 115)、「キリスト教的自由」は、飼いならされ、教会化されたのである

(S. 133)。ケーゼマンは、今日のプロテスタントにおいても、キリスト者とその教会の自由は、全く「月並みな言葉」(Schlagwort)となつてゐると批判し(S. 134)、教会の革新、「教会の非神話化」(die Entmythologisierung der Kirche, S. 124)を主張する。

第五章「遠い道」では、ヘブル書とルカ神学が扱われる。ケーゼマンは、ヘブル書の主題を「終末的な神の民のやすらふ」(die Wanderschaft des endzeitlichen Gottesvolkes, S. 154)と考える。信仰者は、この地上では「旅人」であり「寄留者」であり、天にある故郷を求めてきすらいの旅をつづける(Heb. 11, 13-16)のである。そして、アブラハムにも見られる如く、「絶えざる脱出」(der dauernde Exodus)は、キリスト教的自由の裏面である(S. 155)。「荒野を進む」と(Wüstenzug)がなければ、「約束の地」も存しない。「神の御意志に日々、毎朝、出会わんがために、古きものを放棄することのできる者のみが自由」(S. 156)である。そして、ルカによる二巻も、ヘブル書とは異なった仕方ではあるが、この「遠い道」というテーマを含んでいる。周知のように、それは「救

済史」(Heiligeschichte)である。しかしながら、ケーゼマンによるとルカにおいては、¹⁾「ブル書のような」荒野を通る巡礼者の天への旅ではなく、血と涙のない「勝利の行進」(Siegeszug)である(S. 165)。従って、「ルカの宣教は、十字架の説教(Kreuzespredigt)ではなく」(S. 167)。ルカは、福音をキリスト教と同一視しているのである(S. 173)。ケーゼマンは、ルカ神学を批判する。

第六章「空腹な人たちと義に飢えかわいている人たち」は、ヨハネ黙示録を論ずる。ルカと異なって、ケーゼマンは、同じく「キリストの勝利」を伝えているヨハネ黙示録を極めて高く評価する。ケーゼマンによると、新約聖書の中で、ヨハネ黙示録のみが、ローマ帝国に対する敵意と憎しみを描いている(S. 174)。つまり、ヨハネ黙示録において、キリスト教的自由は、政治的、革命的行為と結合している(S. 175)であり、それは決して地上での平穩(Ruhe)のために存するのではない(S. 186)。イエスの十字架は、そのにない手を地上においては、常に「Niemandland」(S. 182)へと導き、殉教を命ずる(S. 188)。ヨハネ黙示録のもう一つの驚くべき特徴は、

教会全体への「悔い改めと裁きの説教」(die Buß- und Gerichtspredigt)が存することである(S. 175)。キリストの教会が生きるためには、死なねばならないのである(S. 187)。

最後の第七章「御言葉の下の自由」は、ヨハネ福音書について語る。「真理は、あなたがたを自由にするだろう」(8, 32)とこう聖句にのみケーゼマンは留まる。ヨハネにおいて、イエス自身が真理であり、キリスト者に自由をもたらすのである。ヨハネは、マルコ福音書の自由の使信を拾い上げている(S. 193)。イエスが復活したということは、御言葉において、イエスが我々の現在になっっていることを意味する(S. 205)。その「復活」によって我々は「自由」になる。ヨハネにおいて、この「自由」を与えるのは、イエス自身であり、教会の伝統と教義学は、ケーゼマンによると、そのイエスを飼いならす(domestizieren)試みである(S. 201)。

以上、ケーゼマンの主張を、各章毎に簡単に紹介してきた。それによって、本書においては、新約聖書全体が、

一貫して「自由の叫び」(der Ruf der Freiheit)の下に把握されていることが明らかになった。そして、ケーゼマンは、中でも、マルコとヨハネの福音書、パウロとヘブル書、そしてヨハネ黙示録を特に強調していると思われる。

本書は、新約聖書の自由に関するアカデミックな学術論文(たとえば、K. Niedwimmer, *Der Begriff der Freiheit im Neuen Testament*, 1966)ではなく、いわゆる「信仰告白運動」(Bekennnisbewegung)という著者の具体的な活動の場において、そして、教会の内的使用のために語られ、書かれたものである(S. 7)。その論述の半分以上は、現実の世界と教会への現状分析と批判であり、本書は、むしろ実践の書と言えよう。

ケーゼマンの出発点は、「教会の世界的な危機」(eine weltweite kirchliche Krise)という厳しい現実の決定的な認識にあると思われる。その危機の最も深い原因は、ケーゼマンによると、教会に与えられ、教会を召している「自由」を、他ならぬ教会自身が見失っていることにある(S. 9)。キリスト者とその教会は、今日、この

「自由」を再び新たに掘り起こし、その「自由」によって自己自身を呼び起こさせねばならないのである(S. 9)。本書のこのような主張は、現在に至るまでの著者の新約聖書への学的探究の成果と、深く鋭い実存的問題意識の持続との美しい結晶であり、極めて説得力のあるものとなっている。しかしながら、本書は、決して単なる「キリスト教的実践への入門書」ではなく、ケーゼマンの言葉によると「真の、すなわちキリスト中心の神学への情熱的な訴え」(ein leidenschaftlicher Appell zu einer rechten, nämlich christozentrischen Theologie, S. 208)なのである。

キリストの復活の力は、「地上の今日、ここににおいて」(im irdischen Heute und Hier)、キリスト教的自由として実現される(S. 207)。キリスト教的自由は——そしてそのみが——「先取りされた死者からの復活」(die vorweggenommene Auferstehung von der Toten)であり、それは、天で完成される前に、この地上で我々によって証しされるべきである(S. 209)。この「自由の叫びへの戦いが教会史を貫通している」(Der Kampf um den

Ruf der Freiheit durchzieht die Kirchengeschichte.
S. 8) であり、ケーゼマンによると、その「戦い」は、

あらゆる世代において、あらゆるキリスト者の生において絶えずになわれねばならないのである (S. 9)。

本書において、ケーゼマンは、しばしば、「我々の世代」、「私の世代」という表現を用いている。そして、至るところで、第二次大戦下のドイツにおける特殊な状況と体験とが語られている。それらの叙述は、我々の国における我々の世代の我々の状況との根本的相違性を我々に確認せしめるとともに、我々自身が、それぞれの生の現実の只中から、「自由の叫びへの戦い」を新たに始めるべきことを暗示していると思われる。本書におけるケーゼマンの「自由の叫び」(der Ruf der Freiheit) は、すべてのキリスト者を、この戦いへと導き、鼓舞せしめるものである。まさしく、本書は、召喚と論争の書であると言えよう。

(滝沢武人)

昭和四十五年度行事報告

○第九回大会 七月十三日 於・藤女子大学

理事會
總會

昭和四十四年度行事、会計、会計監査報告

議 題

- 一、役員改選の件
- 二、公開講演会の件
- 三、次期大会の件
- 四、「基督教学」第六号発行に関する件

總會決定事項

一、新役員は次の通りとする。

〔會 長〕 中川秀恭

〔会計監査〕 海老沢義道

〔理 事〕 浅井正三、石沢三郎、石沢徹、伊藤貫一、宇野光

雄、大出哲、加藤邦雄、三原武夫、山崎保興

〔幹 事〕 兩貝行磨、植木幹雄、近野亘、白井暢明、滝沢武

人、土屋博

二、公開講演会は秋に江別か旭川で行なう。

三、次期大会は北星学園大学において行なう。時期は北海道哲

学会に続く月曜日。

四、基督教学第六号の編集委員は次の通りとする。

浅井正三、宇野光雄、加藤邦雄、近野亘、山崎保興、渡部